を私語くカバキコマチグモの生活を想像すれば，聊か情熱の詩人らしい感激をさへ呼び起されるのであるが，一度母となつた雌蛛が，同じ葉末の住居の中で世にも稀な犧牲となつて消え果てる凄絶な最後の姿に思ひを致す時，豈冷汗三斗の感を覺えざるものあらんやである。而して又これが母性愛の極致と云はうか，嚴肅なる宿命の規範と云はうか，吾人は只自然界に實在する極端なる驚異的事實の前に，只々敬虔なる合掌の念を禁じ得ないものである。

親蛛を食つて生長した仔蛛は，やがてなつかしの住居を後に，葉末を渡る綠の風に乘つて思ひ思ひの旅に出るのである。生きておれば，この輝かしい愛兒の門出を喜んで見送るであらう所の母蛛を，自ら食ひつくしてしまつた仔蛛達は，故鄉を去るに何の未練もなく，くつきりと晴れ渡つた綠の大空に，スイスイと舞ひのぼつて行くのである。（皇紀二千六百年紀元節の日に稿す）

イソハヘトリグモの分布に關する追加報告

細　野　善　熈

神奈川縣逗子の海水浴場は玆十三四年私の續けて行く處であるが，こゝにイソハヘトリの棲む事は氣が付かなかつた。逗子の海の家に着物を脫いでおいて私は何時も葉山寄りの岩場まで步いて行き，其處で小魚など追廻して餘念がなかつた。そのために蜘蛛までは注意が屆かなかつたものと思ふ。

あそこの岩場は七八年以前ダイナマイトで爆破して船舶のもやひ場になつて終つた。爲に雄大な岩場といふものは無くなつてしまつたが，疊二三枚位のものは葉山迄のあひだ無數にある，波の滿ち引きをくゞつて蟹が敏捷に遊びたはむれてゐるやうなその岩に，去年の七月廿八日，澤山のハヘトリグモ科一種が走り廻つてゐるのには驚いた。マツチ箱，空の卷具なぞを管瓶代りにして♀♂各3頭を捕へたが，岩の間隙へすぐ逃避するので容易には捕まらぬ。そしてそ

の間隙に卵嚢もあり，孵化が濟んで親と同居してゐる幼蛛もゐるのであつた。幼蛛は他のハヘトリグモ類同樣，出盧以前に相當おほきくなつて居り，淡い綠色で斑紋が無く，單眼のみ黑褐色である。腹背にこの頃の一特長たる凹刻が二對見える。

見るとまだ腹中に卵をもつてゐる♀も多數居るので，今後觀察の機會を得るとすれは此點にも興味あるかと思はれた。

岩塊は波打際から約半町迄の間にいちばん澤山あり，午後二時の現在で太股のあたりまで水を被る水中に出てゐるが，岩全體が潮に沒するやうな事があるか否か不明である。

築港の葉山寄りは，三米に餘る垂直のコンクリート防波堤になつてゐるが，頂端は⌐の形をして居り，この庇下にも卵嚢と，走り廻る成體が可成り見られる。岩塊の上で目測約7粍の蠅を捕食してゐる現場を見たが，その他にどんな食餌小動物がゐるものか之亦不明である。私には潮の干滿に對處する生存手段と越冬が興味の中心であるが，何時か知りたいと思つてゐる。

成體は♀♂共に灰色勝ちな黑色印象を受ける上に，腹背後端（蛛疣直上部）に白色の毛束があり，走り廻つてゐる際も注意すれば認め得る。が，♂の方が生時背甲腹背とも光澤があつて細長く，腹背が灰白灰褐何れにしても明るく，その中央に煤黑の縱斑が走り拔け，第一步脚が細く優れてゐるに比して，♀の方は腹部も光澤なく短太で暗色を呈し，腹背に♂のやうな判然とした縱斑無く第一步脚は♂と反對に短太のやうである。これは現場で採集時いくぶん目安になるといふ程度の標徵であるが參考として併記します。

本種は本年に入り十月下旬，植村利夫氏の御同定を乞ふたところ矢張りイソハヘトリグモである事が判り，來夏の樂しみがひとつ增したわけで，紙上乍ら植村氏の御親切に厚く御禮申上げる次第である。

尙ほ此の報告の標題は本紙第2卷108頁の同氏の御文章に追隨したといふ意味である。（昭和14年11月稿）